同志社女子大学生活科学　*Vol*. 50，50～55（2016）

≪資　　料≫

人間による動物のいのちに対する介入をめぐる諸問題

――いのちに関する一考察――

Is Man Allowed to Take an Animal's Life? : A consideration on life

古　性　摩里乃　　諸　井　克　英*
（Marino FURUSHO）（Katsuhide MOROI）

は じ め に

人間のいのちに関する可能性やその意味について，哲学から医学にわたる様々な学問分野で論議が交わされている。さらに，この論議は，人間と自然との関係性のみならず，動物のいのちの問題にまでおよんでいる。本稿では，動物のいのちに焦点をあて，人間による動物のいのちに対する介入をめぐる諸問題を論じる。出発点として，最近，話題になった横浜市にある野毛山動物園での「園内リサイクル」の問題から始めよう。

動物園における生と死の自然連鎖

野毛山動物園では職員たちが「園内リサイクル」と呼ぶシステムが存在する。実は，このシステムは他の動物園に存在するものの公にされているわけではない。動物の権利を擁護する立場にあるジャミーソン・デール（1986）によれば，「リサイクルというのは，殺してその体を他の動物のエサにするという意味の婉曲表現」である。どこの動物園にも子どもたちが動物と触れ合うための区画が設けられていることが多いが，野毛山動物園にも多分に漏れず同様のものが設置されている。この区画は園内では「なかよし広場」と呼ばれ，主に小動物とふれあうことによって，いのちの大切さなどを学習する場とされている（注1）。

しかし，「なかよし広場」で飼育されている小動物は，衰弱するか，病気になり回復の見込みがなければ，いずれ他の区画で飼育されている動物たちの餌として利用される運命にある。職員の手で頭部を叩きつけられるか，首の骨を脱臼させるなどして殺生し餌として与える場合もあれば，蛇などの生き餌としてそのまま与えられることもあるといわれている。この「園内リサイクル」と呼ばれる取り組みの意図は，来園者にいのちの連鎖や食育についてより深く考えてもらうことにある。その一方でこの「園内リサイクル」の存在を積極的に公表することはなく，子どもたちにはこのことは知らせていない。大人の来園者にのみ，尋ねられれば答えるという形式でこの存在を伝えている。

餌となる動物を園内でまかなう，つまり外部から餌を購入せずに余分な外部での殺生をしないという点では，いのちを無駄にせず，経費削減にもつながることから，きわめて合理的である。しかし，園内で餌となる動物とそうでない動物とのいのちの差別化や，特定の動物たちを他の動物の餌とするために人による「殺す」という行為が行われていることも事実である。動物園に生息する動物の維持のために人が特定動物のいのちを利用しているという事実は，もはや動物園という概念の枠を逸脱し，動物を家畜かそれと同等のものとして扱っていると捉えることもできる。

動物とは，本来，人間が感知しない野生世界で生活し，自然が創造した食物連鎖システムに沿ってそのいのちが循環している。たとえば，弱肉強食とは自然の摂理であり，肉食動物が草食動物を捕らえて食すことを人間が知っても，憐憫の情は起こらず，むしろ「仕方がない」と判断することは当然だろう。しかし，動物園で生息している動物は完全に人間の支配下にあり，その生死も人間の手に委ねられている。つまり，動物園側は動物のいのちに対しては責任を負う立場にあると考えることもできる。そこで，本来は動物たちだけの間で完結していた食物連鎖という事象に対し，人間が手を加えることが果たして正しい行いであるのか，という疑問が生じる。また，動物園内で生息している動物が殺されること

同志社女子大学大学院生活科学研究科生活デザイン専攻
*同志社女子大学生活科学部

に対して「かわいそう」という感情が起こる点も，私たちが無意識のうちに野生動物と動物園の動物とを異なるものとして捉えていることを示している。つまり，人間によって捕獲・分類され，限られたスペースで飼育されている動物は，いつしか弱いいのちをもつ守られるべき存在（＝弱者）と見なされているのである。

近年，動物園の機能として，自然環境での動物の生態や動物のいのちの大切さについて来園者に学習してもらうことが強調されている。これは，昨今の文化施設などにおいて戦争の悲惨さなどを直接的には展示しない動向と対照的である。このようなことを勘案すると，野毛山動物園の「園内リサイクル」のように，「生と死」の現実的な側面をあえて来園者に認識させることも必要であろう。ただし，この野毛山動物園の場合の曖昧な公表の仕方は，逆に問題かもしれない。暫定的にここで著者の考えを提示しよう。*「もし本当に自然環境における動物たちの食物連鎖の有様を認識させることが目的であるならば，子どもにもこの『園内リサイクル』の取り組みに関する学習の仕組みを設けるべきであろう。」*

ところで，以上に述べた「園内リサイクル」と一見すると真逆の例として，大阪市天王寺動物園の「まさひろくん」（鶏）を挙げることができる〈注2〉。この「まさひろくん」は，2015年7月に，タヌキやイタチの生き餌のために鶏の雛として購入された。同時期に，たまたま餌の食べ方を学習していないマガモの雛がおり，その先生役を担い生き餌という難を逃れた。同年9月には，「鳥の楽園」の区画に出没する野生のイタチのおとりにされるが，イタチが1カ月間出没せず命拾いした。若鶏になると通常は，ライオン等の肉食獣の餌となるが，たまたま猛禽舎からの要請がなかった。この3度の危機を乗り越え，同年10月にはその強運が話題となり，飼育員2人の名前（マサト・ヨシヒロ）から「まさひろ」と名付けられた。その後，この「まさひろくん」は生き餌の運命から解放され，飼育員とともに散歩したり，他の動物と触れ合ったりするようになった（図1）。その強運から，抱き上げた人が幸せになれると評判になっている。その後，同じような境遇で「よしと」という弟分も現れた〈注3〉。

このエピソードは，一見したところ，微笑ましい出来事として描かれているが，この2羽のいのちを継続させているのは，飼育員の判断と自らの幸せを祈願してこの「まさひろくん」や「よしとくん」を抱き上げる来園者といえる。つまり，園内の動物のいのちに人間が介入していることに変わりがないのである。本稿の主題からは逸脱するが，「まさひろくん」を実際に抱き上げても，鶏本来の臭いや特有の毛並みをほとんど感じることはなかった（著者による確認）。人間（飼育員や来園者）とより近い距離で生活している「まさひろくん」は，もはや飼育動物というよりもペットに近い存在となっている。

図1　大阪市天王寺動物園内の「まさひろくん」（2016年9月10日；著者撮影）

いずれにせよ，野毛山動物園で問題とされた「園内リサイクル」は，人間が動物を含めた他者のいのちの継続に対する介入をすることの是非に関わる重要な倫理的問題を含んでいる。

人の死－脳死判定を例として－

ここで，本稿の主目的から若干逸脱するが，人間の死の問題にも触れておこう。藤永（1992）によれば，医療技術の急速な進展に伴い，次のような事象が生ずることになった。つまり，「脳が不可逆的に機能喪失あるいは細胞死している（脳死）にもかかわらず，心臓・肺臓が機能を維持し続けている」ということが可能になったのである。このような所謂「脳死状態」は，生と死の境界を曖昧にするとともに，「死の決定」を特定の人間に委ねたのである。つまり，「脳死の定義・判定基準」を人間の側に設定させることとなった。このような状況のなかで，藤永（1992）は，意図的な脳死判定の可能性を指摘した。たとえば，「障がい者などが臓器提供者として意図的に早めの脳死判定をされる」ことが危惧される。また「脳死状態の患者の生命維持装置を取り外すかどうか」という問題なども生じた。つまり，脳死に関わる問題は，実は，先に言及した動物の生と死に対する人間による介入の問題と本質的に類似しているのである。

動物園内に生息している動物のいのちの問題

旭山動物園園長の坂東（2012）は，高齢のオオカミを例として，「治療・延命は，人間だけが持つ概念」ということを指摘している。つまり，この問題は，「動物たちを見てかわいいという感情」という人間側に起こる「勝手な」感情を根拠として，動物のいのちの価値に差をつけながら展示することと，本質的には同様であるといえる。坂東は動物の「着飾った姿」ではなく「ありのままの姿」を来園者に見せることを重要視している。さらに彼は「動物園は楽しい場所で死を伝えるのはタブー」という考えに対抗し，「動物がどう生きるかということは，どう死ぬか」という理念を掲げ，旭山動物園では動物の死の原因に関する説明を積極的に行っている。

ところで，動物園に生息する動物のいのちに対する社会的介入の極端な事例として，第Ⅱ次大戦下に実際に行われた所謂「戦時猛獣処分」を挙げることができる。

「支那事変勃発」（1937 年），「日独伊三国軍事同盟締結」（1940 年）と日本が戦争の道を進んでいく中で，太平洋戦争開戦（1941 年 12 月）の半年前に軍の命令により上野動物園・園長代理「福田三郎」は，「動物園非常処置要綱」を作成した（1941 年 7 月；表 1）。つまり，非常時（＝戦争，とりわけ空襲）における動物園の対策が迫られたのである（恩賜上野動物園，1982）。戦局険しくなった 1943 年には上野動物園で 14 種 27 頭の「猛獣処分」（大半が硝酸ストリキニーネによる毒殺）が行われた。この「猛獣処分」は他の動物園でも実施され，たとえば，同年に大阪市天王寺動物園でもヒグマなどが毒殺された（10 種 26 頭が犠牲，大阪市天王寺動物園，2016）。この処分は，隠れて実施されたのではなく，「動物ですら時局に協力して死地に赴く」と積極的に宣伝された（石田，2010）。

ところで，上野動物園で飼育されていたジョン，トンキー，ワンリーの 3 頭の象に関するエピソードは（恩賜上野動物園，1982），動物のいのちに対する人間の介入の是非に関する問題として示唆的である。殺処分の要請の中で，動物園の飼育員たちは象のいのちを守るために仙台の動物園への疎開など対策を講じたが上手くいかなかった。1943 年には，毒入りの馬鈴薯が与えられたものの象たちはそれを口にしなかったために，絶食させることとなった。ジョンがまず絶食させられ，13 日目に死亡した。その後トンキーとワンリーも絶食に入ることとなり，ワンリーは 17 日目に，トンキーは 30 日目にいのちを閉じた。

もともと凶暴な性格であったジョンについては，飼育員も処分を受け入れていたが，特にトンキーは穏やかで芸達者という性質から処分がためらわれていた。トンキーは，絶食させられても，餌をもらおうと飼育員の前で芸をして見せていた。しかし，衰弱が進むと飼育員を見つめてばかりいるようになった。根負けした飼育員は 2 頭に少しずつ餌を与えていたが，最終的にはまったく餌を与えられずに象たちは餓死した。

これまで飼育していた象たちを絶食させ処分するという行為は完全に人間側の都合によるものである。一方で，芸をして餌をもらおうとする象たちの仕草は人間の子どもを彷彿とさせるため，飼育員たちには相当な葛藤を引き起こしたと推測できる。象たちを餓死させてしまったことは，飼育員たちの中におそらく消えることがない後悔の念として深く刻まれたことだろう。このような 3 頭の象のエピソードは，戦争が人間のいのちを無慈悲に奪ったということだけでなく，動物園という場を舞台にした動物のいのちに対する人間の介入に伴う人間（＝この場合は飼育員）にとっての悲惨さを示している。

なお，以上のエピソードは，土田（1970）によって絵本として公刊され，戦争が動物にとっても悲惨な出来事であることを今なお語り続けている（ちなみに，この絵本は現時点で第 180 刷に到達している）。しかし，長谷川（2000）は，この絵本が「猛獣処分」を次の 3 点で神話化したとして批判した。①「猛獣処分」の実施と米軍のよる大規模な空襲との間の時間差（本格的な東京空襲は 1944 年 11 月から），②「猛獣処分」の決定主体の曖昧化，③「猛獣処分」による国民の安全確保（空襲によ

表 1　「動物園非常処置要綱」における動物園飼育動物に対する措置（恩賜上野動物園，1982）

危急の度合い	措置
第 1 期　防空下令アリタルトキ	直チニ第 1・第 2 種危険動物ノ処置準備
第 2 期　空襲アリタルトキ	第 1・第 2 種動物処置ノ準備ヲ完了，待機ノ態勢ヲ執リ，第 3 種動物ニ対シテモ処置ノ準備
第 3 期　空襲ニ依ル爆撃火災等ノ危険接近シタルトキ	危険ノ規模，接近ノ程度ニ応ジ第 1・第 2 種動物ヲ順次処置シ，更ニ危険ノ及ブトキハ第 3 種動物ヲモ順次処置ス

図 2-a　大阪市天王寺動物園の「動物慰霊碑」（1957 年建立／2016 年 8 月 20 日；著者撮影）

図 2-b　大阪市天王寺動物園における「戦時中の動物園展ー戦災に消えた動物たちへの鎮魂ー」での紙芝居上演（2016 年 8 月 9 日〜21 日／2016 年 8 月 20 日；著者撮影）

る動物舎倒壊に伴い猛獣が市民に害をおよぼす可能性）。要するに，長谷川が指摘するように，「猛獣処分」は，空襲時の危険対処というよりも「都民に一種のショックを与えて防空態勢に本腰を入れさせようという意図」によっているのである。土田が描いた『かわいそうな　ぞう』はこの意図を隠蔽し，実際には「死んだぞうの上を敵機が飛ぶという存在しえない場面」で「せんそうを　やめろ。」という叫びで終わる。長谷川がいう「戦争という大状況」ですべてを覆うことにより，実際には当時の軍部と動物園飼育員という当事者たちによる動物のいのちへの身勝手な介入という本質を消失させている。

上野動物園と同様に「猛獣処分」を行った大阪市天王寺動物園では（この処分は 1943 年 9 月から 1944 年 3 月に行われ，米軍による最初の大阪空襲は 1945 年 3 月であることから，上述の長谷川による批判の枠組みが同様

図 2-c　大阪市天王寺動物園にて猛獣処分されたヒョウと飼育員・原さんの逸話（2016 年 8 月 20 日；著者撮影）

に適用される），戦後まもなく園内に「動物慰霊碑」が建立された（図 2-a）。さらに，今でも，戦時下の動物園における「猛獣処分」を歴史的に振り返ることにより動物のいのちに関する問題を考える試みが行われている（図 2-b, 2-c）。

動物を育てて自ら食べることの意味

学校の中で子どもたち自らを動物飼育に従事させ，いのちの大切さを学ばせるという教育技法が，多くの学校とりわけ小学校で実践されている。立川・田中（2010）は山口県内の小学校を対象（330 校）に動物飼育の現状を調査した。大半の学校（101 校）が「情操教育（心，いのちの教育）」を挙げ，飼育教育の目的が「愛情飼育（人と動物が親しみ合う，情を通わす）」（175 校）や「いのちの飼育（愛情飼育のうち，特にいのちに注目）」（142 校）にあると答えた。さらに，動物飼育による子どもの変化については肯定的な結果をもたらしていると認めた（「動物をかわいがるようになった」「いのちを大切にするようになった」「責任感をもって育てているようだ」「児童の気持ちがやすらいでいるようだ」）。ところが興味深いことに，「鶏を育てて大きくなったら殺して食べる」という設問に対する賛成意見は 20.2% に過ぎなかった。つまり，立川・田中（2010）によれば，学校におけるいのちの教育の特徴をみると，「生」への過度の注目が顕著であり，「死」については積極的な理解を求めずオブラートに包み込まれているのが現状といえる。

以上に述べたように，動物飼育を通したいのちの大切さの学習は，自ら飼育した動物を子どもたちが最終的に食べる機会を設けることによって，動物のいのちが人間

にとってどのような意味をもつかを子ども自身に考えさせることも含まれることもある。石川・小野塚・良波・奥井・得丸（2016）は，小学校5年生を対象とした複合型授業「食を見つめる」の中で児童が書いた作文を素材としてテキストマイニングとクラスター分析によって児童の心情変化を捉えた。「豚飼育に関する事前の論議段階⇒実際に豚との関わりの段階⇒豚の出荷・食肉としての試食段階」に対応して，「豚やいのちに対する他人事のような意識」，「飼育に伴い自己の内面との向き合い」，「思考上の視野の広がりや内面化」という心情の変化過程が浮き彫りになった。石川らは，このような授業の意義を認めつつ，事情を熟知していない外部者からの反応による担当教師のストレスも指摘している。

ところで，人気コミックの『銀の匙』（荒川，2011）は，北海道の農業高校を舞台に，主人公「八軒勇吾」が，それまでの生活では遭遇しなかった環境の中で苦悩しながら，自己成長を遂げていく物語である。「八軒」は中高一貫の進学校からあえて農業高校を受験し，入学した。この物語の前半で先述した動物のいのちと人間にとっての食の問題が重要な軸として描かれている。

「八軒」は，実習で世話をした子豚に情が移り，名前を付けようとする。しかし3ヵ月後にその子豚は出荷される予定であり，同輩の「客観的に育てられる」という提案に従い「豚丼」と名付けた。その後，彼は，①自ら飼育して成長した豚を食べるということと，②人間が生きていくために動物を食べても構わないということとの間の葛藤に陥った。最終的に，3ヵ月後に自らのアルバイト代で「豚丼」の肉を買い取り，自らの手でベーコンに加工し食した。

この一連の過程で，「八軒」は次のように発言している（荒川，2011）。「『生き物を食うってこんなもんだよね』って割り切って達観しちゃえば楽だけど，俺は，それは，やっぱ嫌です！」。「おいしく頂くのが供養になるとか，そういうのは人間のエゴだろ！」。

「豚丼」だけでなく，この『銀の匙』に登場する動物の多くは，「経済動物」として人間に利用される立場にある。経済動物とは「効率よく大量に生産する事によって収入の安定を得る」ための存在を指している。「八軒」の同輩はほとんどが農家出身であり，教師を含め動物を飼育し食べるという行為は「あたりまえのこと」として受け入れられている。つまり，それぞれの動物にはいのちがあるという意識は希薄である。一方で「八軒」の「名前をつける」という行為は，「豚」というカテゴリーから「豚丼」という存在を区別するものであり，先述の経済動物という観念からは生じ得ない異なる感情を生起させてしまった。「八軒」の特異な行動をきっかけとして，まわりの人々が抱いている「経済動物」という観念も少しずつ変化していく様が描かれている。つまり同輩たちが「八軒」とともに，「動物を育て，殺して食べる」という過程を当然視せず，議論を交わすようになった。

動物たちを取り巻く環境や顛末は，人間によって定められているところが大きい。「動物を食べるために殺す」ということも，人間が生きていく上では必要不可欠である。『銀の匙』の作者は，その事実から目をそらすのではなく，動物のいのちを支配する側としての責任の自覚（食べる＝いのちを最後まで見届ける）を「八軒」を通して促しているといえる。

もちろん，この「八軒」の顛末は，石川ら（2016）が記している複合型授業実施に伴う教師側のストレスの存在を考慮するときわめて楽観的すぎるかもしれない。結局，ジャミーソン・デール（1986）が指摘するように，「人間の生存そのもののために必要なことは」「他の多くの生物たちの一員として生きることを学ぶこと」だとしても，人間が「多くの生物の上に君臨する」という考えに誘惑されがちになるからである。

まとめ－暫定的結論－

冒頭部分で，筆者なりの考えを提示した（*もし本当に自然環境における動物たちの食物連鎖の有様を認識させることが目的であるならば，子どもにもこの「園内リサイクル」の取り組みに関する学習の仕組みを設けるべきであろう*）。しかしながら，この問題を「動物を含めた他者のいのちに対する人間による介入」の是非という本質的問題として位置づけるならば，前述した脳死の問題，動物園内での動物のいのちに対する理念や，子どもに対するいのちの教育とも強く関わることになり，提示した筆者による考えの妥当性についてはさらに深く考察すべきであるといえよう。さらにいえば，先に挙げた小学校における動物飼育をツールとしたいのちの教育の効果性や意義などについても（立川・田中，2010；石川ら，2016），「教師－児童」という枠組みだけでなく，親を含め地域社会全体で考えていくべき問題である。このように，所謂いのちの教育を地域社会全体に拡大することによって，当該地域で暮らす高齢者や障がい者なども含めた共生の問題などにもつながっていくだろう。

ピーター・シンガー（1986）は，知的能力による人間と他の動物の区別がたとえば何らかの重篤な障がいを負っている者を考えると単純に矛盾に陥ることを指摘している。彼によれば，この矛盾は「純粋で単純なスピージ

ズム（種による差別）」を持ち出すことによってしか解決できない。実は，先述した「八軒」の顛末は，人間が他の動物よりも優位にあることを前提とした「スピージズム」に基づいているのだ。しかしながら，「倫理的見地からいえば，二本足であろうと，四本足であろうと，足がなかろうと，すべて同じ立場にあるのである」（ピーター・シンガー，1986）ことに単純に同意することは，菜食主義者への誘いとなる。

動物園における「園内リサイクル」の問題を契機とした本稿での論議は，以上で考察したように単純ではなく，結局は人間存在をどのように捉えるのかという深遠な観点から今後も継続していくべきであろう。

〈付記〉

本稿の執筆にあたっては，生活デザイン専攻講義「生活と倫理特論」（小﨑　眞教授；2016 年度春学期）におけるいのちの問題に関する論議が契機となった。

引 用 文 献

荒川　弘　2011　『銀の匙　1－4』小学館

坂東　元　2012　伝えあう生命（いのち）の輝き－行動展示と動物の子育てを中心に－　教育心理学年報，**51**, 177-182.

ジャミーソン・デール（Dale Jamieson）1986　動物園反対論　ピーター・シンガー（Singer Peter）（編）戸田　清（訳）『動物の権利』（*In Defence of Animals*〈1985〉）技術と人間　184-200 頁

藤永芳純　1992　生命倫理の諸問題－脳死と臓器移植をめぐって－　道徳教育学論集，**7**, 33-48.

長谷川　潮　2000『戦争児童文学は真実をつたえてきたか』梨の木舎

石田　戢　2010『日本の動物園』東京大学出版会

石川みどり・小野塚知美・良波祥吾・奥井一畿・得丸定子　2016　小学校での動物飼育授業における児童の心情変化－豚の飼育から出荷まで－　上越教育大学研究紀要，**35**, 239-255.

恩賜上野動物園　1982『上野動物園百年史』第一法規出版株式会社

大阪市天王寺動物園　2016『天王寺動物園 100 年の足あと』大阪市天王寺動物園

ピーター・シンガー（Singer Peter）1986　プロローグ・倫理学と新しい動物解放運動　ピーター・シンガー（Singer Peter）（編）戸田　清（訳）『動物の権利』（*In Defence of Animals*〈1985〉）技術と人間　17-31 頁

立川奏枝・田中理絵　2010　小学校教育における動物飼育といのちの教育　山口大学教育学部研究論叢（第 3 部），**59**, 191-205.

土田由岐雄　1970『かわいそうな　ぞう』金の星社

［インターネットより引用］

〈注 1〉dot.（朝日新聞出版）「ふれあった動物がエサになる　残酷な『園内リサイクル』」*http : //dot.asahi.com/aera/2014021900004.html*（2016 年 7 月 21 日閲覧）

〈注 2〉産経 WEST「“奇跡のニワトリ”意外な人気『生き餌』のはずが 3 度も生き延び…『会えたら幸せになれる』」*http : //www.sankei.com/west/news/160604/wst 1606040034-n1.html*（2016 年 9 月 7 日閲覧）

〈注 3〉THE PAGE 大阪「エサから一転人気者に　天王寺動物園『幸運のニワトリ』話題」https : //thepage. jp / osaka / detail / 20160606-00000002-wordleafv（2016 年 9 月 7 日閲覧）

（2016 年 11 月 14 日受理）